

## 小江戸大江戸200キロフットレース

谷 佳紀

202.7キロで制限時間は36時間。峠のような大きな上りが無い。時速6キロで行っても時間が余る。完走は楽なものだ。大会の要綱を読み、スタートしてからもしばらくはそう思っていた。

川越は小江戸と呼ばれ蔵造りの町として有名。そしてこの地は雁坂峠越えマラソンのゴールでもあり、集合場所の湯遊ランドは馴染みのあるお風呂屋さん。

五日朝8時スタート。9キロ先の荒川の土手に向かう。スタート直後は蔵造りの街並みを通してゆく。一番賑やかな通りだが、観光客はまだいなく静かだ。立ち止まってはカメラを向けるランナーが多い。でもそれも1キロ弱で終る。

昨日までの悪天候はどこへやら明るい青空だ。しかし冷えている。それなのに何としたことか十分もしないうちに汗が噴き出てきた。そんなに早く走っているつもりはない。体調は良い。確かに少し厚着をしている。長そでシャツに半袖のシャツを重ね着して、下はタイツを履き、ウインドブレーカーの上下で身を包んでいる。汗びっしょり。脱ぎたくなかったが脱ぐ時間ももったいない。それに土手に出ればおそらく風がビュービュー、これでちょうどよいくらいだろう。5キロ通過が26分、早すぎる。こんなスピードで行ったら体が持たない。この汗はそのためか。

入間川を突っ切り荒川の土手で9キロ。ここから延々と土手の自転車道に行く。果たして風が強い、それも真正面からだ。汗がたちまち引き、少し開き気味の口中はからからに乾く。マスクをしているが喉の乾

燥と花粉症が心配だ。

15キロの通過が9時50分。あっという間にスピードが落ちている。

ところどころ河原が運動公園になっている。少年野球やサッカーで賑やか。応援団兼カメラマンのご両親がグラウンドを囲んでいる。土手ほど風が無いようで穏やかな春の賑わいだ。遠くに意外に大きく見える富士山は真っ白。それにしても強い風だ。後ろから吹いてくれたらどれほどありがたいか、それなのに……、愚痴は止そう。

26キロの熊谷市立健康スポーツセンターのエイドに着いたのが11時20分。時速8キロぐらいだ。なんのことはない予定通りの到着時間だ。風の強さを思えば早すぎると思えるがもうすでに最後尾。みんな飛ばしているようだ。だがこれで良い。これで行ってもさらにスピードが落ちるに決まっている。急がない。

スポーツセンターを出て全くの一人旅。前にも後ろにもランナーがいない。35キロぐらいのところで、後ろからやってきたランナーが話しかけてくる。急がないだけで強いランナーであることがわかる。ジョギングを始めたばかりという余裕の表情。このまま行けば30時間ぐらいでゴールできますね、という。確かにそうだが、私はこのまま行けないから無理である。なるべくなら明るいうちに入りたいが、彼なら楽なものだろう。

36キロで橋を渡り土手から降りる。荒川沿いの国道140号線に行く。秩父へ行く道だ。

玉淀大橋北で254号線に入るのだが、その橋が全然見えてこない。おかしいおかしいと思いつつ走っていると、鉄道をまたぐ陸橋に出る。秩父鉄道だ。左折地点より1キロ以上行き過ぎている。ずい分注意して

いたのだが左折箇所を見落とした。戻らなければならない。私についてきたのだろうか、ランナーが一人やってきた。一緒に戻る。車の接触事故がありそれを眺めていた地元の人に道を確認する。玉淀大橋がコースから見えると思っていたのが間違いのもと。左折しないと見えてこない。その左折の交差点の標識が見にくく、しかも橋ばかりに注意をしていたので標識を見落としてしまった。さらにそこは歩道橋になっていたのだが、歩道橋を渡って先に行こうとした時、ちょっと待てよおかしいと思い、地図を確認しようかと思ったのだが白線があった。進むべき方向を指示する白線である。ただ他の大会でも同じことをする。この白線は我々には関係の無い白線だった。こういう間違いを防ぐためにも地図を見なければならない。それなのに白線があるから大丈夫と思い込んでしまった。残念。

30分の無駄な時間を費やして51キロの玉淀エイドに着いたのが15時40分。時速7キロを大きく切っている。このままだと完走できても時間ぎりぎりだ。バナナやカップラーメンで腹を満たし川越に向かう。254号をひたすらに行くだけだから迷う場所はそんなにない。

玉淀エイドが道路の右側にあったのでそのまま右を走っていると、大きな声で呼び止められる。左にエイドがある。もう川越まで無いはずなのでびっくりする。顔ぶれに見覚えのある人がいる。スポーツエイドジャパンの人たちが私設エイドを作ってくれたらしい。蕎麦とお汁粉を頂いた。これで川越まで食べなくても行ける。

70キロ付近で女性ランナーに追いついたが、すぐに追い抜かれる。抜きつ抜かれつを繰り返しつつ、と言えば恰好が良いが、事実は女性が分岐点等で走る方向に迷い立

ち止まってしまうので私が追いつくだけのこと。そんなことを何回か繰り返す。前にも後ろにもランナーがほとんどいないから、迷えば後ろから来るランナーを待つしかない。私を抜いても私を待つことになる。結局80キロ付近から私と一緒に走る。

国道と別れ湯遊ランドへの道に入ったところで、女性の応援にやってきた仲間と出会い女性は立ち止る。私は待つべきか行くべきか迷ったが、結局待った。

湯遊ランド手前で女性は意外なことを言う。「東京方面に行くのですか」と言うから「行きますよ」と言えば、女性はここでリタイアするという。体調不良でここまで来られるとは思わなかったそう。途中ずいぶん歩いたらしい。

22時25分にようやく91キロの湯遊ランドに着く。稲荷ずしやら海苔巻やら、お菓子など片っ端から食べ、太子堂から今届いたところだけどいる？というのでどら焼きを二個もらってザックに入れる。さあ出発だと勢いよく出たもののどっちに行けばよいのかわからない。腹ごしらえに気を取られ、調べるのを忘れていた。少し前に出たランナーの姿があるので追いかける。すぐに姿を失った。地図を見てもさっぱりわからない。五万分の一の地図は大まかで、細かなところが読みとれない。男の人がいたので声を書けたら、聞く前に「わからない」と拒否された。コース案内では39号線から254号線に入るようになっている。ただ道路標識が見当たらないので、この道が39号線なのかわからない。道に間違いはないだろうと、根拠薄弱の確信で行けば、やっと道路標識が出てきた。39号であった。しばらく行けば254号につながる道路案内板が目に入る。

さすが都会地だ。人通りは少ないが車が

多く、街灯が明るい。ヘッドランプが無くても道は明るい。遅れ気味だがまだ先は長い。必死になるのはまだ先だと、楽に走れるスピードで行く。

楽にゴールできると思っていたが、それは傲慢で浅はかであったことがもうわかっている。ゴールできるにしてもぎりぎり、タイムアウトになるかもしれない。いまは自重すべき。

どこからだろうか、たぶん新座か朝霞あたりからだと思う。後ろから来た男性ランナーと道ずれになった。しかも向うは私を知っていた。「湯遊ランドまで女性と一緒に来たでしょう。あの女性と同じ走友会にいます。女性をあそこでリタイアしました。実は私もリタイアするつもりで、一時間ばかりあそこで休んでいたのですが、気が変わって……」という。走友会の名前は記憶にある。川越に向かう途中、父と娘という風情のお二人からコーラとチョコレートを頂いた。「私たちの走友会の仲間が走っています」と話されていた。お世話になりましたとお礼を言う。私のスピードが彼には適当のようで、ときどき並んで話をするが、後ろに位置してついてくる。道を良く知っている。それは私にも都合がよい。

腹が減っている。「なか卯」で食事をしたと思い、コース案内を見て注意するのだが見つからない。このマラソン、なか卯がスポンサーになっていて、二度食事が出来るのだ。カレーライスを注文するつもりなのだが、店が見つからないのでは食べようがない。成増では絶対見つける。見つけないうちで成増を通過しないと目をぎらつかせていたら見つかった。信号を渡らなくてはならない。彼はちょっと躊躇したが、ご一緒して良いかというので悪いはずがない。一緒に店に入ると、抜いたり抜かれたりして

いた青年がいた。青年の注文量がすごい。牛井の大盛りにうどんである。スポンサーが面倒を見ましようという金額をオーバーしているので、オーバー分を支払っていた。

美味しいエネルギーを腹に詰め込んだので元気が出る。青年は腹が満足したら眠くなったそうだ。ベンチを見つけた。少し眠ってゆくという。また二人になる。相棒は遅れ気味なので少しペースを落としたり、また上げたりと、様子を見ながら走る。葛西臨海公園までは道に詳しい彼と一緒にのほうが私にも都合がよいと思える。それに少しぐらいスピードを上げて、信号が多く思うように走れないので、急ごうとしても無理なのだ。とは言え、私なら駆け抜ける信号が彼は無理なことが多くなった。

チェックポイントの一つで、ここを間違えなく通過したという証拠写真を取るよう義務付けられている日本橋の道路元標を撮り、建て替えのために壊されて影も形もない歌舞伎座の前を通過し、商店街の人が掃除をしている勝鬨橋を渡り、145キロの葛西臨海公園に着いたのが6日の9時10分。一位のランナーは二時間半前の6時50分にすでにゴールしている。もちろんこの時にはそのようなことは知らない。カップラーメンを食べ、CCレモンを飲んだのは覚えているが、ほかに何を食べたのだろうか。ともかくたくさん食べた。彼は少し眠るという。私はトイレの個室に入り大休止する。

再び一人になる。これからはのんびりできない。スピードを上げなければと思うがさっぱりだ。困ったものだが、どういうわけか気持ちものんびりしてイライラしない。162キロ付近のガソリンスタンドでトイレを借りて出てくると、前方に三人連れがいる。その一人はまぎれもなく彼だ。少し先で追いつくと、彼は喜び、「貴方の事を話し

ていたのですよ」。と言って「この人についてゆけば完走できる」と二人にいう。二人はご夫婦で奥さんは参加者ではなく夫のために途中から伴走しているらしい。

冗談じゃない。私は完走請負人じゃない。葛西臨海公園は私の方が先に出たらしいから、追いつかれたのは私の方だ。ただ私は地図を見るのにずいぶん時間を使っている。彼にはそういう余計な時間が無いだろう。ともかく道を良く知っている。ご一緒するのも良いだろうが、もうぐずぐずできない。ついて来られるならご一緒しようという気持ちになり、「遅れても待ちませんから」と彼に伝えて一気にスピードを上げる。

この再会は私にも好都合だった。それまでのだらけた気分が消えて気持ちが引き締まった。完走できるスピードは絶対維持しようと気合が入る。

私は早く走れないが時速 6 キロぐらいなら相当に持続できる。もちろんこのスピードは普通なら走っていると言えない早歩き程度だ。しかし今はもうこれでも疾走になる。7 キロは出ていると思う、もし彼がついてこなければそれまでのこと。私はひとり旅で行く。信号に引っ掛からず 2 キロぐらい行って振り返ってみると後ろにいる。これなら大丈夫だ、最後まで彼と行こうと決める。彼はペースを作るのが苦手で、その点私の走り方は安定していて都合がよいそう。土手に出ると水の補給なしで 20 キロ走らなければならない。ペットボトルを一本半ザックに入れてあるが足りそうもないので二本購入し、三本半の水を担ぐ。重さがずしりと来る。持ち過ぎの感もあるが腹の調子は良い。飲みたくなったらがんがんで飲もうじゃないか。

若い警察官があちこちに入る。警戒のためではなさそうだ。警察学校の実習だろう

か。信号ストップすると異様な服装の挙動不審の私に話しかけてきた。マラソンの説明をし、「熱中症に気をつけて」というので、「ペットボトル三本半、持ち過ぎで、重すぎて」と言って信号が青になる。

170 キロ、いよいよ土手に出る。覚悟していた風もない。暑い。もう信号はない。これからは「信号に引っ掛かってねえ」という言い訳はできない。実力あるのみだ。ぐんぐん飛ばす。傍目で見ればよたよた。遊んでいる人、ウオーキングしている人、そして走っている人がたくさんいる。私は激しく走っているが、小太りの青年が女心の歌の調子で（歌っているのではない、そんな感じで）ほわほわ走り抜いてゆく。小学生が奇異なまなざしで抜いてゆく。

この堤防の 20 キロは、5 キロごとに休憩を入れることにして 45 分で刻んで行きたかったが、成功したのは一回だけだった。50 分で行ったのが二回、残りの一回は 55 分かった。6 キロのスピードがいかにか早いかを十分に味わった土手だった。土手はそろそろ終わりというところで少し遅れた彼を待って腰をおろし水を飲み、ふと気付くと彼がいらない。私に気付かず先に行ってしまったのかなと思い、前方を見ると少し離れて休んでいる。私に悪いと思って一人で行くつもりになったらしい。そんな気は私にない。安心はできないがゴールは確実な情勢になっている。一緒の方が気合を入れやすい。189 キロに着いたのが 17 時 25 分。ここで土手が終わる。二時間半で残り 14 キロ弱行かねばならない。大会名は 200 キロだが、203 キロ弱ある。行けるだろうが安心は禁物。川越に向かうバイパスに入る。走りやすいアスファルト道だ。残り 6 キロぐらいのところ蹴躓いて吹っ飛ぶ。ほんの数ミリの突起に足が引っ掛かった。幸いに打撲も擦

り傷もない。心配だったのは眼鏡だが、これも大丈夫。

彼が入っている走友会の一人が自転車でやってきた。川越でリタイヤするつもりでいたとき、一休みしてから飲み屋に行く約束をしていた相棒とのこと。自転車で乗りながら彼に話しかける。ゆっくり漕いでいるのだが私にはとても速い。それなのに彼は悠々と話をしている。置いてゆかれそう。余裕があるなあ、あんなに走れるなら楽にゴールじゃないかと、必死になってついてゆく。信号ストップになり、私たちを抜いていった三人が青になるのを待っていた。五人の集団になる。自転車は「ではゴールで」と別の道に行く。五人のうち一人の青年はたちまちに走り去った。四人になり、もうゴールは間違いない、時間の余裕が出来たと思ったが、最後の最後とんでもない事態になる。

バイパスに別れ、湯遊ランドの道に入るところで彼の指示を受け信号を待ち道路を横断し反対側に移動する。道案内は彼に任せていた私は何の疑問を持たなかったが、他の二人がコースが違うという。横断せずに信号のところでバイパスの脇を走っている道路に入るのだった。

この間違いは私にも責任がある。信号が遠くに見えてきたところで彼が「歩道橋を渡る道と、それを避ける道のどちらをゆきましようか」と言ってきた。当然に地図ではどうなっているのか確認すべきところだが、「走りやすい道の方がいいかも」と言ってしまった。疲労による注意力の低下だろう。ゴールに気を取られコースの確認を忘れた。彼は道を知っているため地図を見ないで、目印になっているホテルを誤認し、そのホテルをよぎる道筋を考えてしまったようだ。

また道路を横断することになった。車の切れ目を狙って強引に突っ切る。それから二人が先導してゆくが、別の道に入ってしまったようであらう。彼は間違っていることに気付いていたが、先ほどの間違いのため口を出せなかったと私にささやく。もう彼に頼るしかない。彼も責任を感じて、先頭を突っ走る。必死になってついて行く。残り時間10分ぐらいのところまでスピードを緩め、もう大丈夫、間違いなくゴールできるとにこやかに伝えてくれた。

何日か後に発表された一覧表を見ると完走率が低い。出走者97名中49名しか完走していない。甘く見ちゃいけないコースだった。